仆題夢園記
下の巻

七變花
鶴亭秀賀作
歌川國貞画
金松堂
壽梓
上の巻

金花七變化

第一至三編

へ13
1182
1

軍器式変化

初編二

合八

ナ
30二
合
八
1
所

特
へ遠13
1182
1

七變花

鶴亭秀賀作
歌川國貞画

上の巻

宮内庁書陵部
1182
明治三七年一一月二四日
宮内庁蔵書

金花七變化

彫安

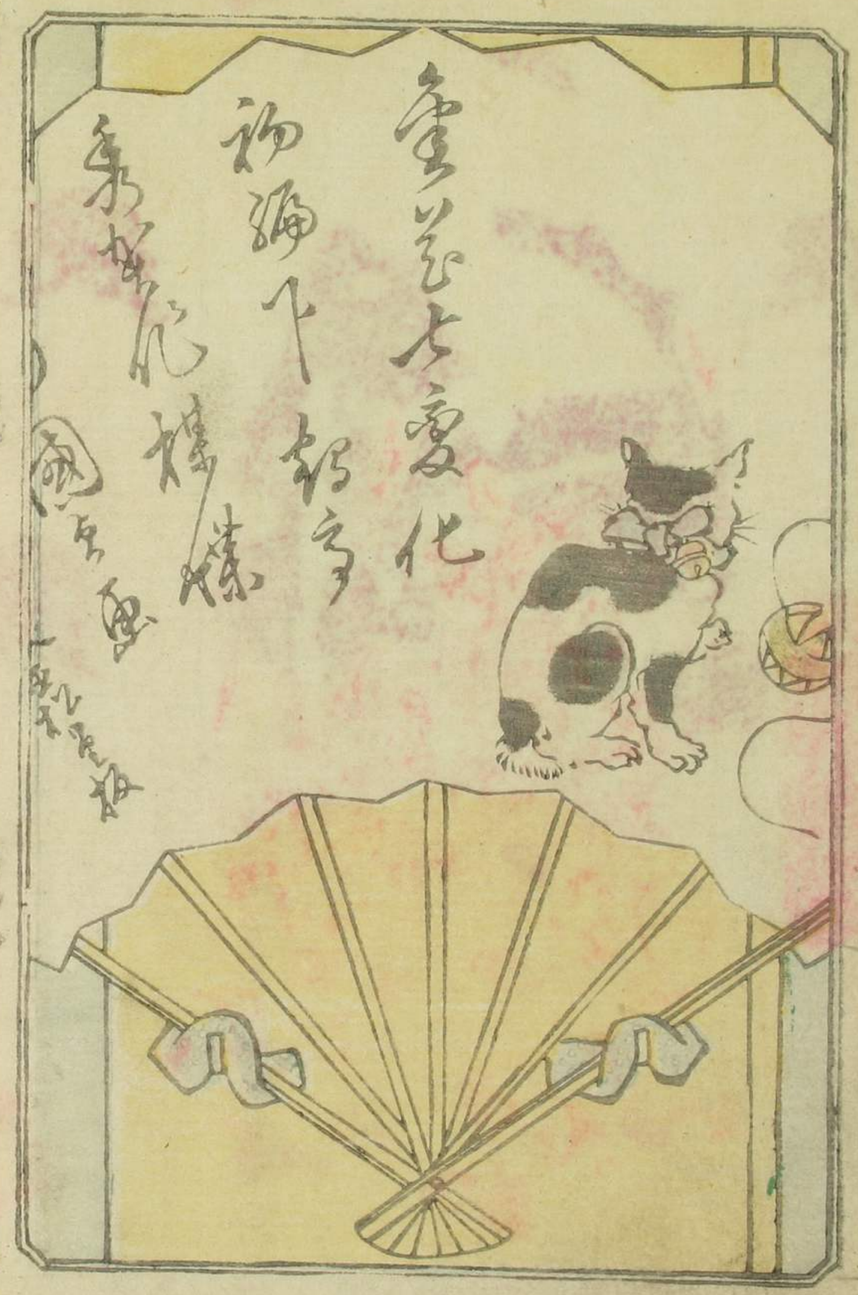
初編上冊

秀賀作

國貞画

楷大久

辻岡文庫



東京師範学校

松門獨閉て年月を送り。自清光を不視時候の移るを不知。暗々たる菴室ふ徒ふ眠りて空然たる睡中ふ毫を採バ。机ふ若て。晩の稗史作る。是ぞ彼西の都と稱呼られ中國ふ威を輝せ。大内家の客將猫間弾正宗連グ支跡ふ說發篇を次ふ至ル。

聲者緑之市の非命を悲んで。其母烏羽玉怨念を猫ふ託せバ忽神通自在を得て。大守ふ化做さんと七變るせ。奇異の金花猫譚。虚支與實支欲ちら孫共ア興再應。飜案。嵯峨の夜櫻朧げふ霞の糸ふ長編其首卷の稿脱バ覚て駛く春の夢枕の下ふ曉を告る鴉の軒近く來て。アホウ〳〵

安政七申春發兌

鶴亭秀賀戯記

○彈正の愛子
○猫間の妻烏羽玉
○緑の之丞盲人と

○大内家客分の旗下猫間彈正宗連
朝鮮國傳来白檀の碁盤玉金と號角山の秘藏あせーゞ故あり
大内家の重器とありしふ此盤より珍宴を引出さ此譚は發端
たまごまの盤
後緑の市と名
ありて後緑の来る

猫間の養子祢津太郎

府

史記評林
戰國策
通鑑綱目

國貞畫　秀賀作

乳
緑

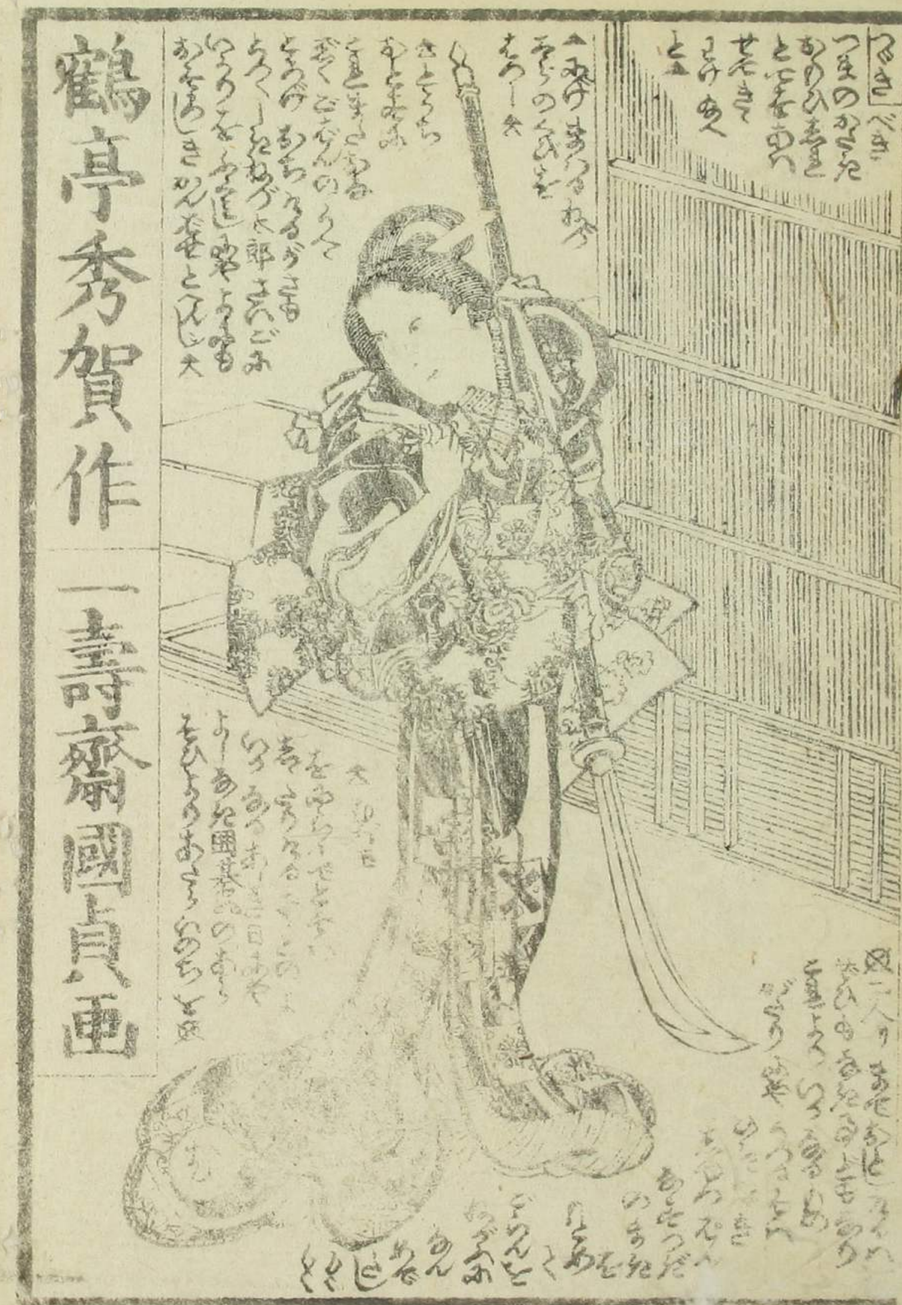
小春の夢

弾
緑

緑

小春の夫

鶴亭秀賀作　壽齋國貞画



武田高月　大丸百貨
人形町通り　飯島啓三郎謹製
小見二十銅
中見四八銅

神仙一角丸
氣つけ毒けし　小見五厘　諸病のよし
調合所　上総國　東金町　大野傳兵衛

周防染櫻模様　四編　五編　六編　貞雅作　國貞画

梅春霞引始　三編　譽文作　讀切　國周画

濡衣女鳴神　十編　秀賀編沢　讀切　國貞画

道外江戸名所　大錦絵　五十番續　廣景画

文　地本双紙問屋　金松堂　横山町三丁目　辻岡屋文助梓

元治元年甲子秋開板標目

金華七變化　十五編より廿篇迄　鶴亭秀賀著作　梅蝶樓國貞画

右の殊の外御評判宜敷作者画工一世一代の新案新工夫を凝し彫摺ホネ念を入古今の菱本と做し看官競高覽を願ふと云

水鏡山鳥奇譚　初篇より三篇迄　鶴亭秀賀作　一鶯齋國周画

假扮巽八景　初篇　假名垣魯文作　二篇より切　同　画

和哥紫小町文章　初篇より追出　鶴亭秀賀作　板歌川國周画

仝　地本双紙　問屋　金松堂　横山町三丁目　辻岡屋文助梓

金
華
仕題曲五國史
岡文庫
上の巻

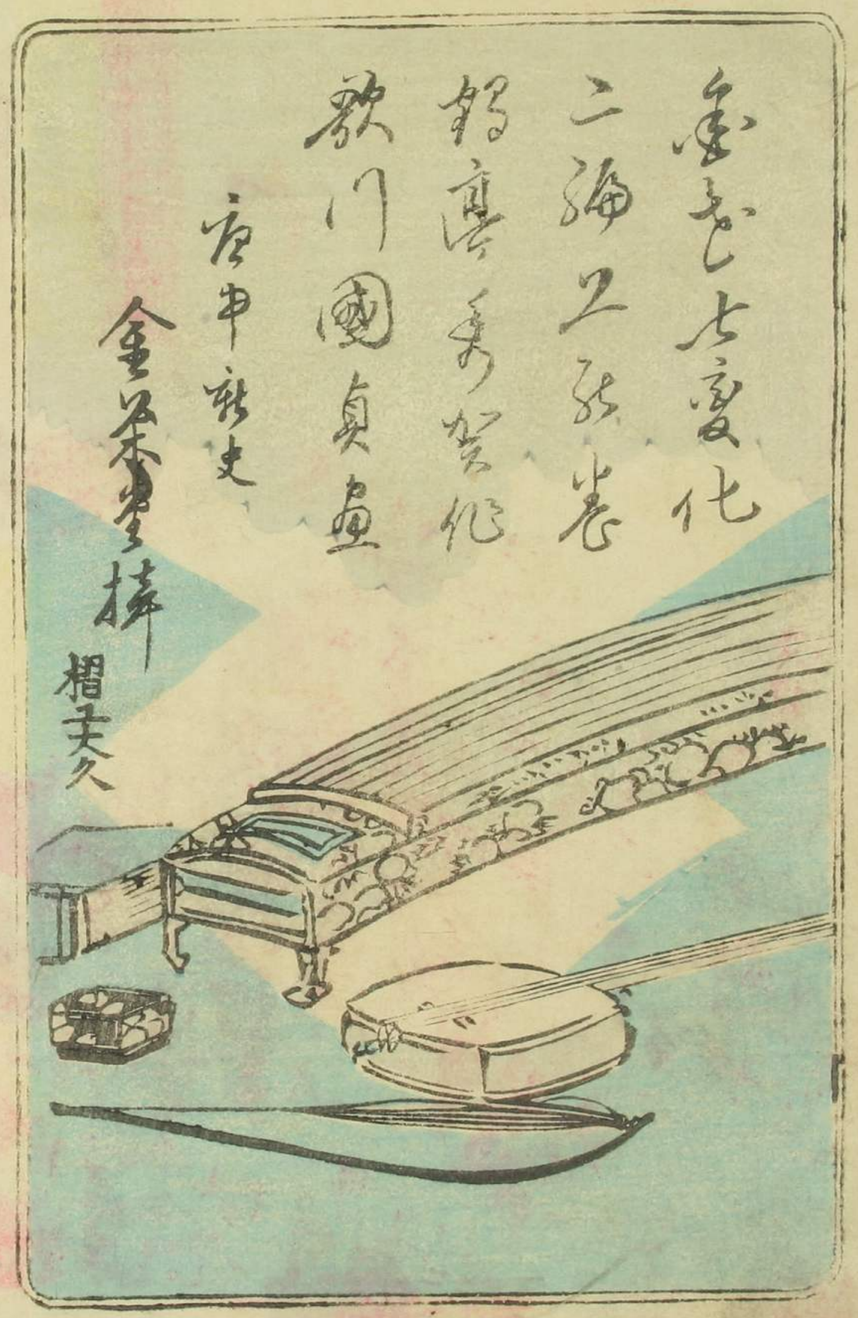
鶴亭秀賀作
歌川國貞画
七變化
二編
下の巻

金華
仆題曲亭馬琴
岡文庫
上の巻

七變化二編

鶴亭秀賀作
歌川國貞画

下の巻

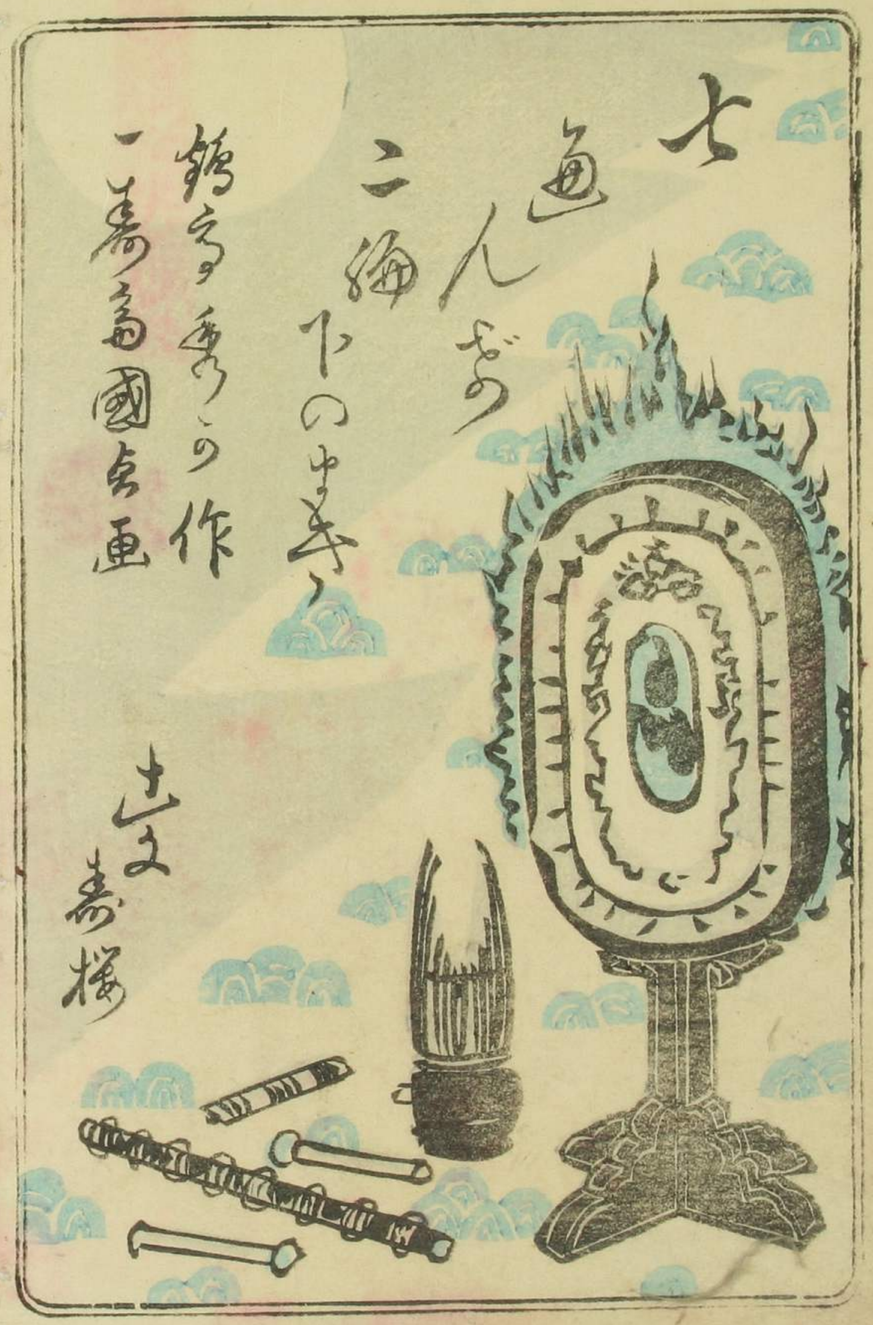


七変化

二編下の巻

鶴亭秀賀の作

一蕙斎國貞画



筆を耕して食ふ言王孟が。陳分漢の唐土の人筆採バめのくれと言ー兼好ハ。不視世の往古人夫い朋み万巻の書を暗記博学廣才の人是ハ一文不知の文盲作者。彼清少納言の言葉も不耻。嚮み七変傳ふ戯書を著ー。金松堂の主人を引誘。櫻木み登せーみ既み次篇と懇望て亦掻たてる行燈み油さての夜延業欲み眼の為に一心み。不寐も鼠の縁語あるべ其ちひさ人嗅當て猫の一変ー千粤説話。猶七変化の怪談い巻を換編を重る毎み耳珍談趣向を設て僕の腹ち。化の皮さ人顯めのり。と爾言

庚申発兒 鶴亭秀賀誌

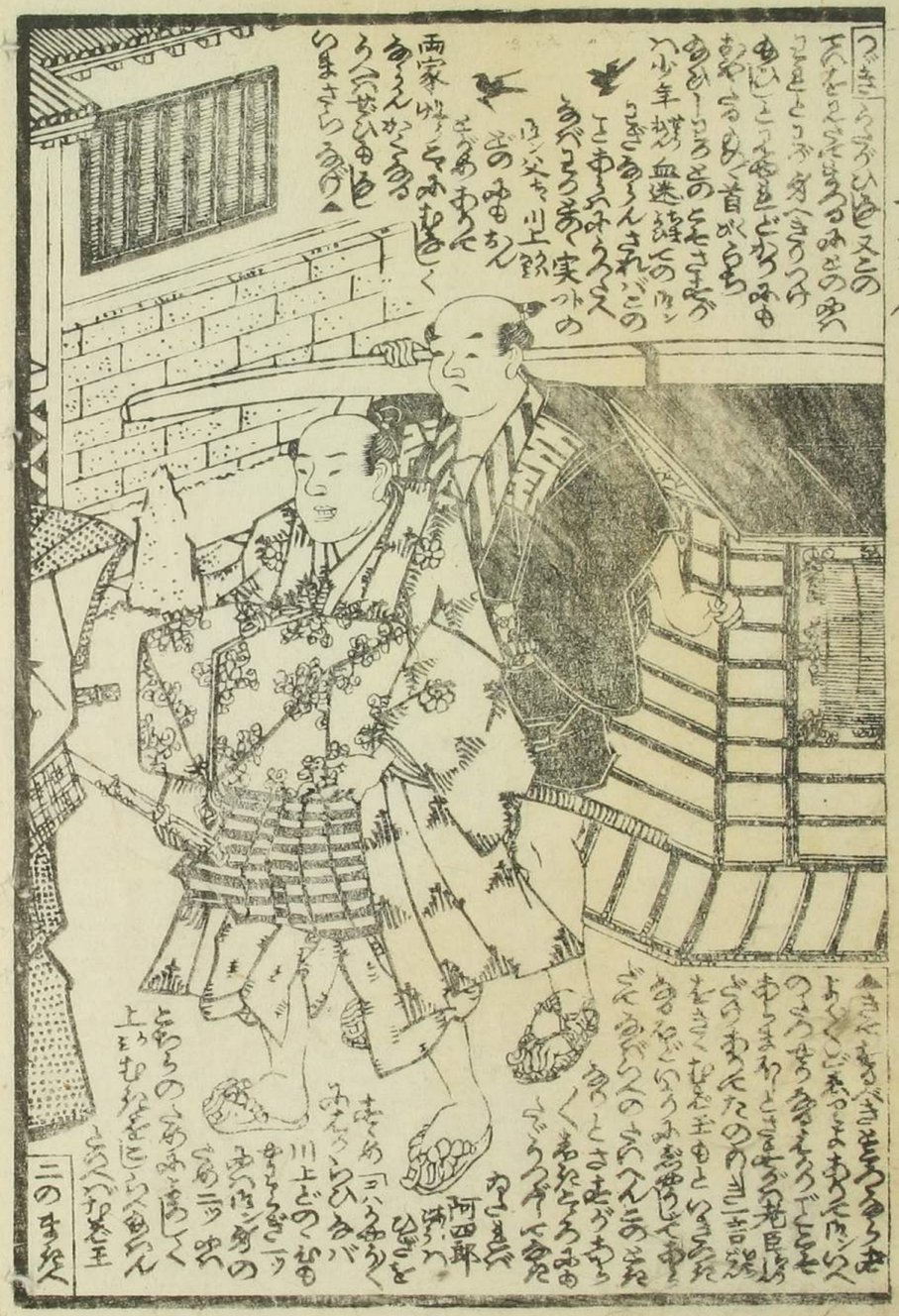
祐津太郎の首
○大内家の權臣
川上民部武行
○民部の妻
阿袖

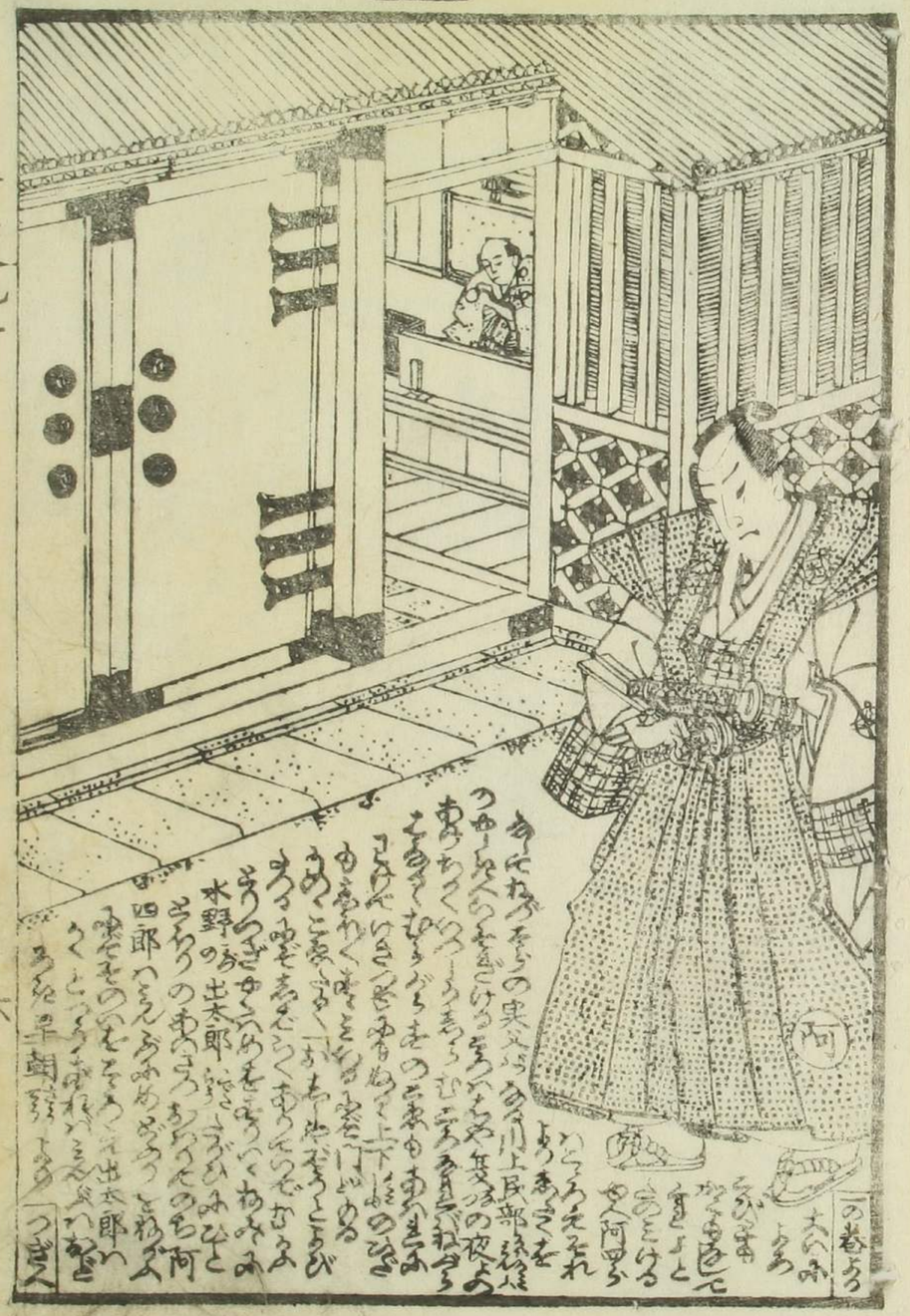
○猫間の郎黨
難波
阿四郎
玉だまの盤
彈正の首

彈正の一念猫とあり是も亦
玉垂とゝふ後七變七種々の
怪異を做し諸人を腦ま古
今未曾有の金花猫あり
玉猫の守役
初瀬
緑之助赤間
の家を次で
後緑の市
ふるう
緑の市の
乳母
春野

初編下の巻よりつゞく
徐津太郎の首
彈正の首

再出初瀬
猫間の後家烏羽玉





民

袖
阿

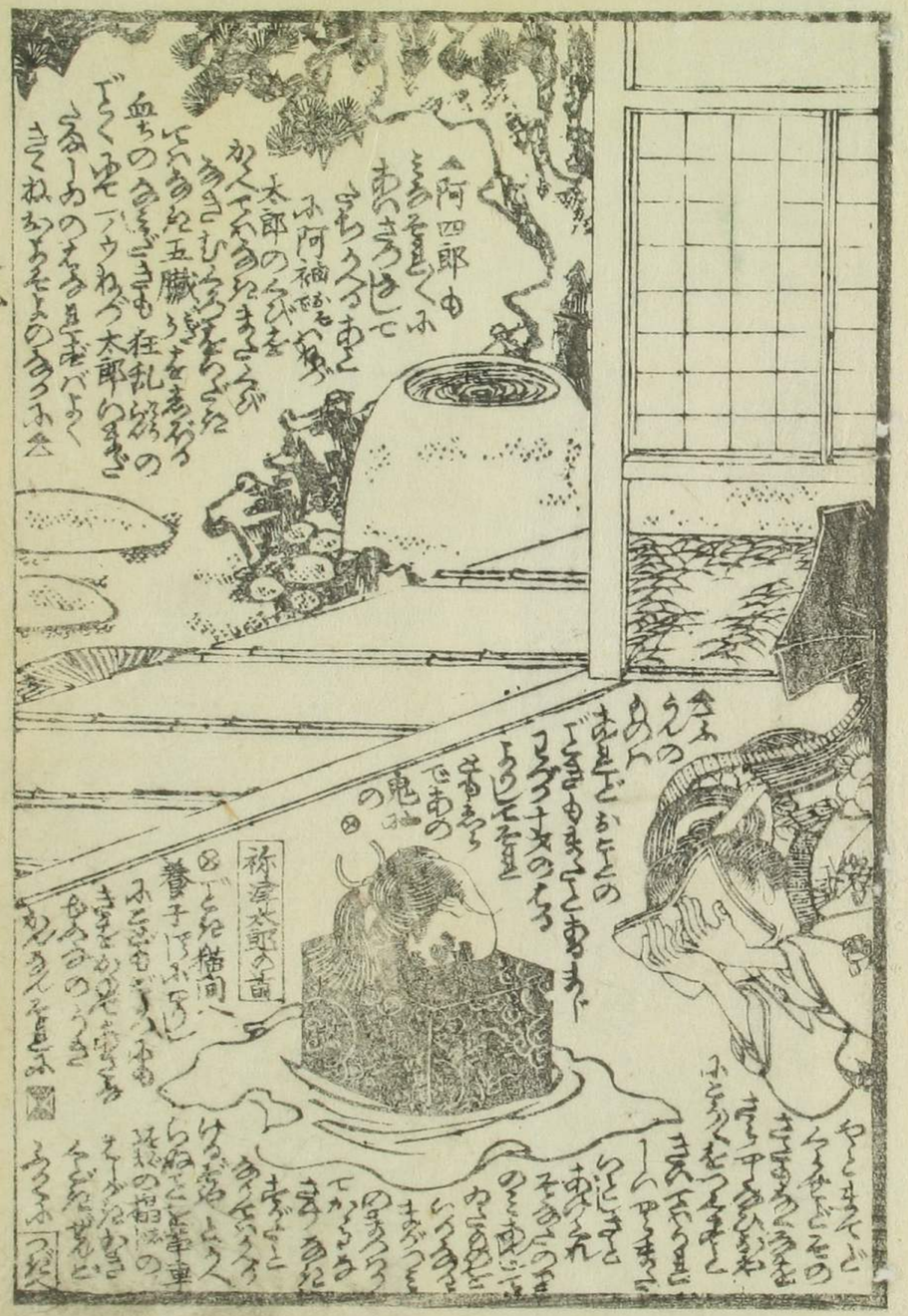
阿
弥

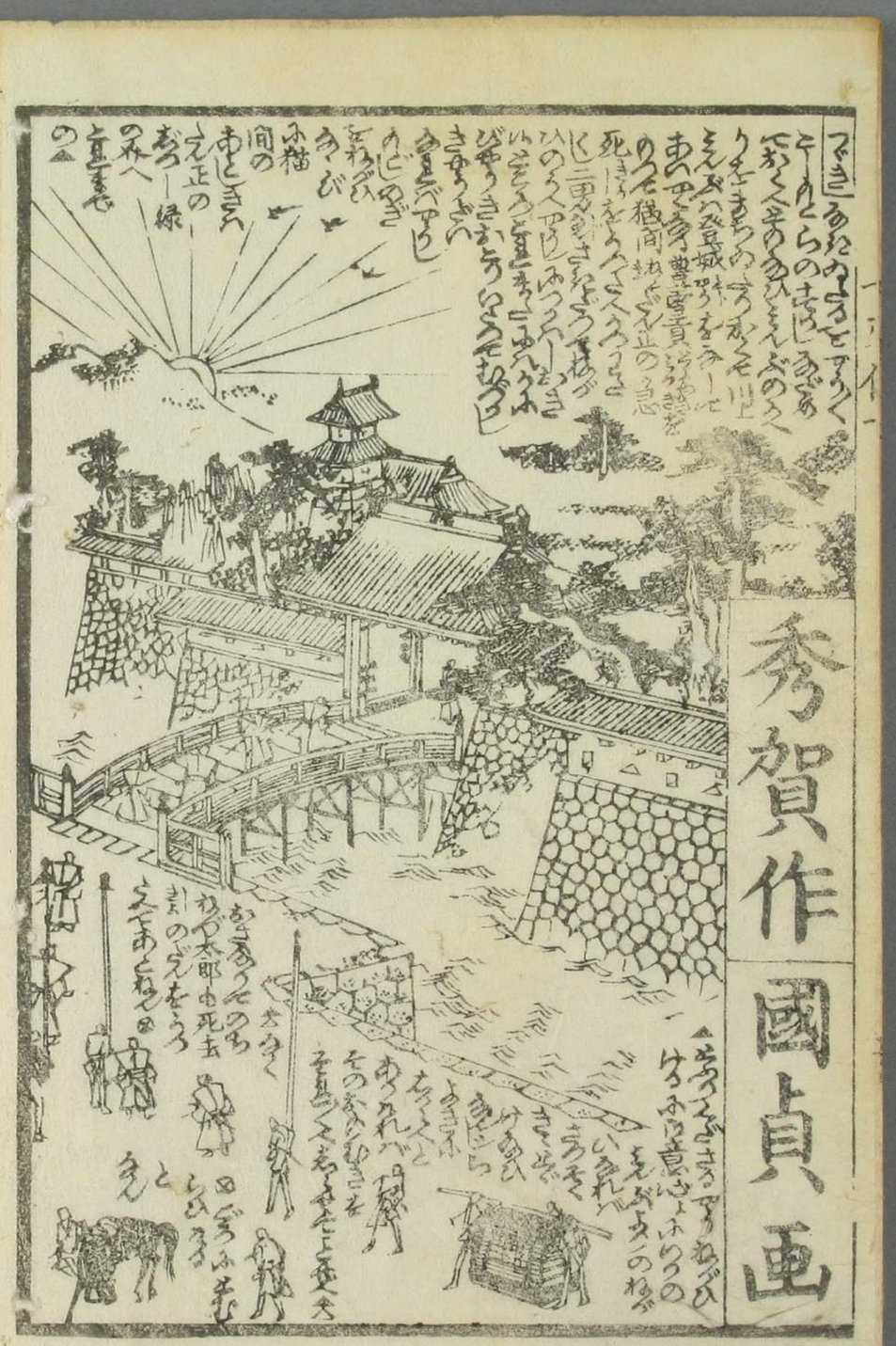
民

民
袖

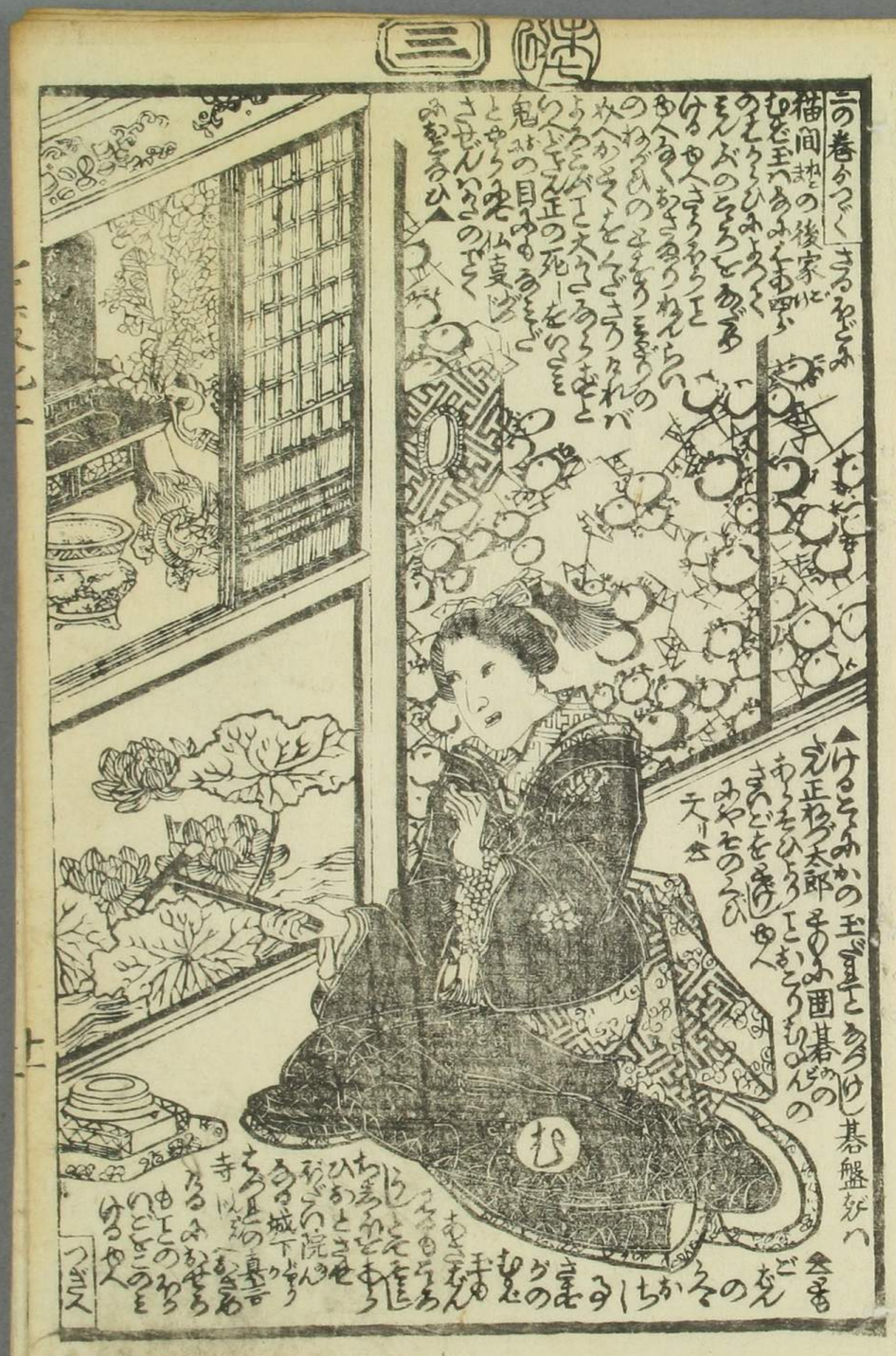
阿

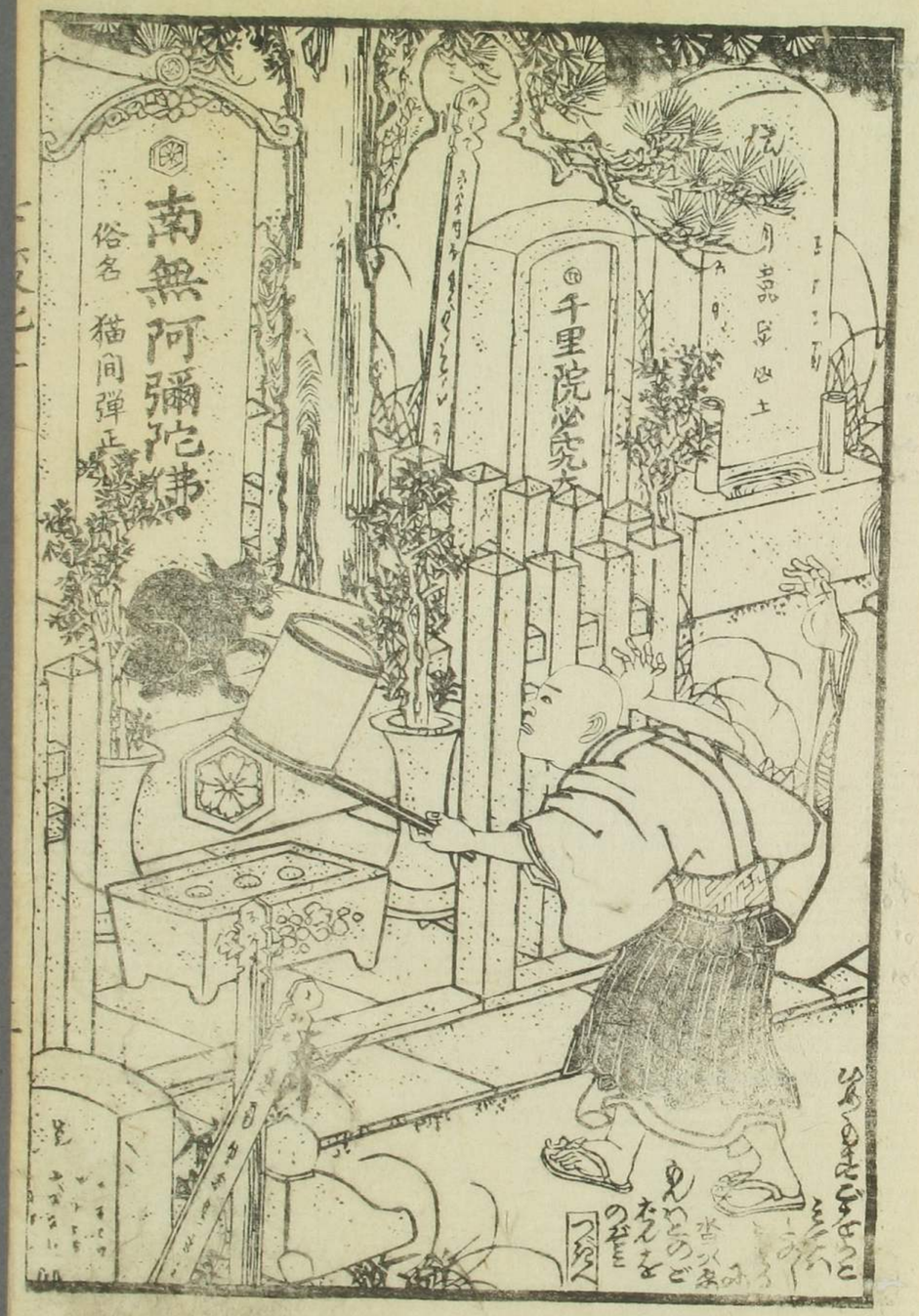
袖





秀賀作　國貞画

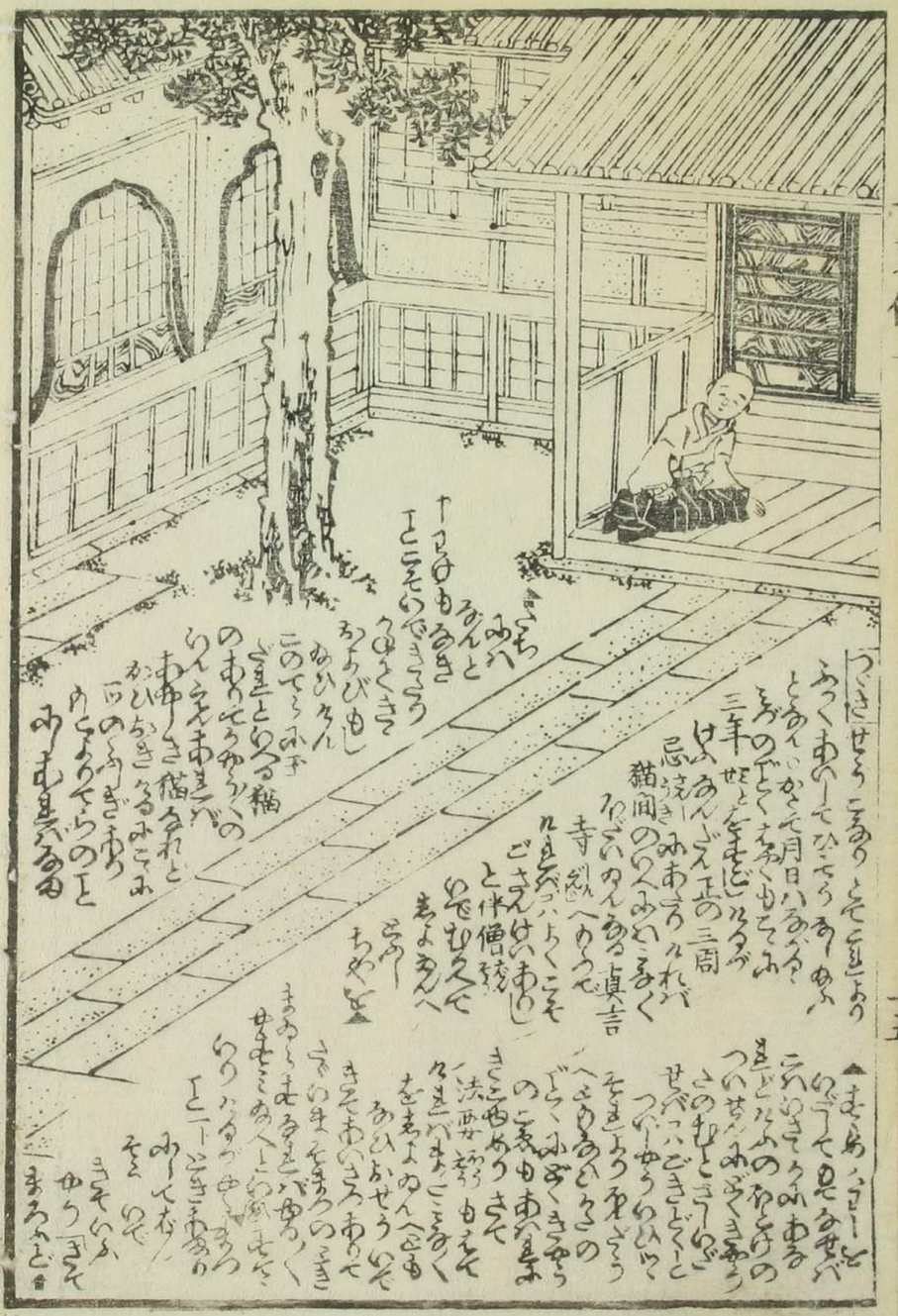



南無阿彌陀佛
俗名 猫間弾正
千里院必究
月華堂出土

神田 國周

沢
白

大内殿
朝鮮国
白檀
真言寺
猫



五風十雨無支
春

つゞき

かれてさいはひそのまゝ一ぢ二
わかつてあくとくみのとくあれくさぐ
やらんとそのつるどあのさろみあんと
せんまえ多くさろいろみつてあとのいべ
そのみねとのきびしのぎらうきとひとう
どちつてあきをつをきとひとう
あろしみかのいちろるのそろものの
とあとにてうてくをさろ王さるの
さろさようにつくとをあるそや
たあくあのをとのびえら見
「イとハルドもあるをとそとねびえ
せびのあるをとをとねびえ
ぐれつてろそのをやきねらろの
らちとそあのをもろ。さまの
ろとふみぐろの数あるくけのの
あろとを見べを師匠せり古川検校
紀州のをくめのまるをちく官金ゑんを
京都をくへのぐれせ市名いを
さをく緑の市みあろを見べ
そのようをびれとをれと
ちをきを人ををまくをきあろ
めに酒宴をのちを人
をえをきをのちをと
をりあ庵丁ろをを
てのざやきをせ人
いのさんトとるよろ
をろのをびてを見べコハ
いろみをしをみをろろの

さびしそのろの
めまで
をの下
をもあろ
ざまべらろみ
くとあきを
わろろ」が
真言寺剣
みくの
をを
をろめ
いをまををあの
玉ねこのあをきを
みをあまをこべ
せーあろうと
ろをとも赤あを
のひをろの猫
ろをべをまろの
をれをあのひろの
めをろうるおを玉
いをををもあろを
ろろをへあき
をををまま
ををとををがへ
へのををを」みをを
の下みを猫のいをを
あふをあのきをけるへ
りや玉のいあろざろ。

▲うめやと
のぞきん
ををべ玉
猫のあわくの
ろろををねを
をこををろ
りんしまろ
をろろを

文久二壬戌年新版目次

色長武者扇物語　柳水亭作　梅蝶樓國貞画
宮本名郷音武術譽　柳水亭作　梅蝶樓國貞画　三同
三重相錦織文章　柳水亭作　廿日國卿画　二
蝶鶴裾野春月雨丹　柳亭亭種彦作　一恵齋芳幾画　二
金花七變化　鶴亭秀賀作　梅蝶樓國貞画　二 三

地本　江戸國横山町三丁目　㊐屋　辻岡屋文助
山邨　仁　金松堂

神仙一角丸
調合所　東京大野傳兵衛

武書屋　大百疋　小百二十錢　中百四十八錢

文久二壬戌年春新板目録

柳藤魁双紙　柳為永歌長作　八遍一尾　壽齊國貞画

都鳥汀松若　柳水亭種清作　三切同　歌川國盛画

初紅葉小倉色紙　初五切同　歌川國盛画

蝶鶴亀山涼　初二三同　歌川國盛画

義經千本櫻　初三三同　歌川國盛画

金洲水升石川　花笠文京作　二切上　勇斎國芳画

縁綱詞花咲　半亭英壽作　二切上　松濤芳宗画

當利生一網　為永歌長作　二切上　歌川國盛画

濡衣女鳴神　為永歌長作　三切上　壽齊國貞画

地本問屋　江戸両國横山町三丁目
紙問屋　辻岡屋文助
金松堂

金花七
金松堂壽梓
上の巻

鶴亭秀賀作
歌川國貞画
一ゝ編
変化
下の巻

金花七
金松堂寿梓
表題曲五閑画
上の巻

変花七変化三篇

鶴亭秀賀作
歌川國貞画

金松堂寿梓
辛酉春彫

北方豊画

鶴亭秀賀作
歌川國貞画

変花七変化三編

下の巻

開ル猫の我皇國へ渉ーしん人皇六十六代一条院の御宇ホそめく。
高麗國ヨリ貢献ヲ奉ーく帝叡慮ホ叶フの余。猫ホ命婦の
官を賜ふホ夫より江湖ホ専是を愛ー。田夫養ー稲穀を守ーあ山妻
寵ーく十二時を辨ぜ雖而或い是と蒙貴と異称ぜ其性狎ーすホ
早く忘るホ速あり三年是を飼ふ一度去ーて二度其主を不省。
年を経ホ至てい能怪を做ーしく。今や其変化の怪傳も茲ホ
三輯稿脱ーす。彼猫の尾尾と草帚の緒言有ーも不用無ても不辨。
故ホ些少筆走ーく。端書ーも棹舟ーふん。

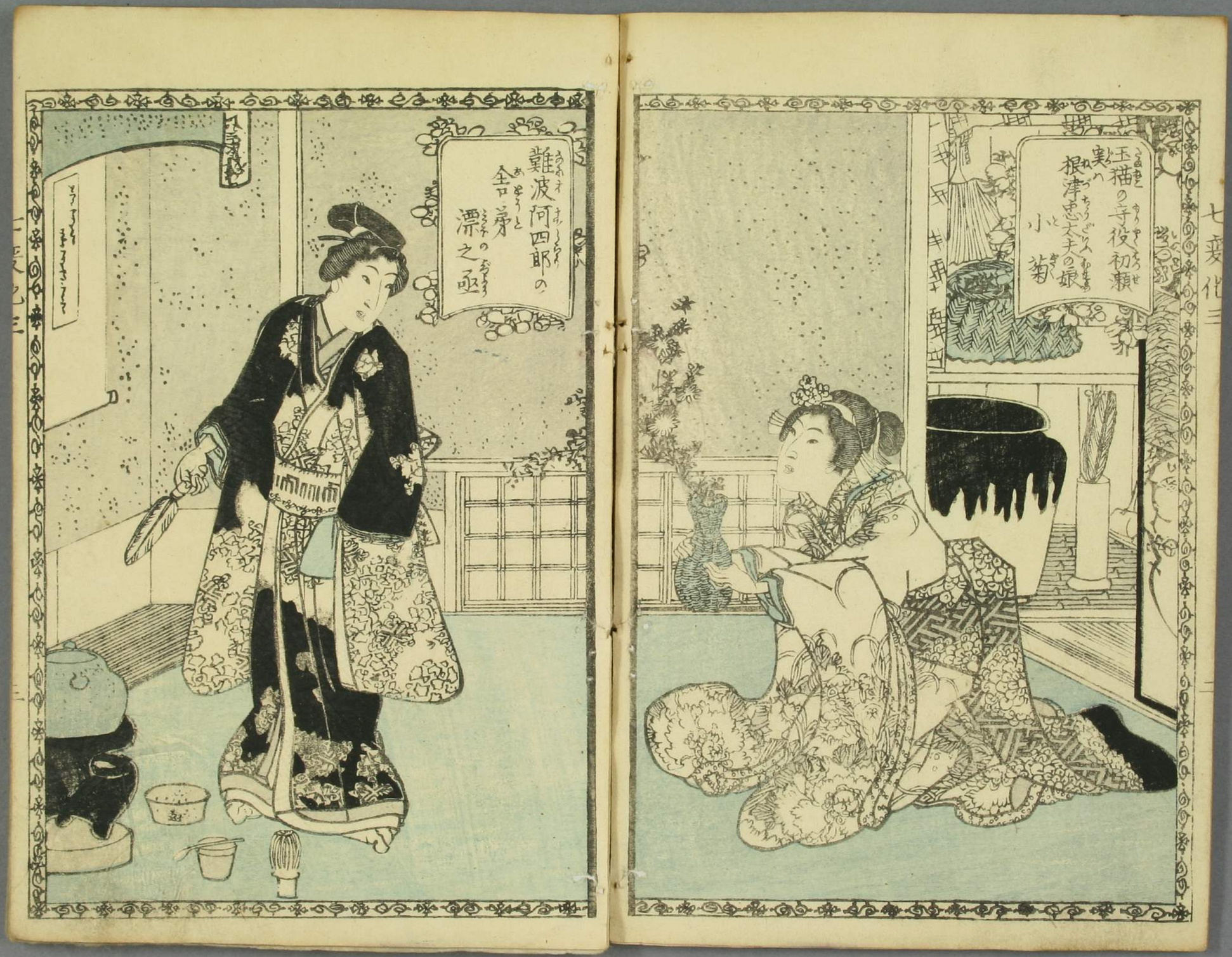
萬延辛酉春

鶴亭秀賀識

玄湖書

川上民部の妹
萩咲
是忠太夫の妻
大内家の近習頭
根津忠太夫
其怨念の虎
家を亡し
身を苦しめ
妻子を失ふ

政賢
謬り妊猫を殺し
大内家の近習頭
小森半左衛門晴宗
猫を愛し禍を子孫に残す


玉猫の手役初瀬
実は
根津忠大夫の娘
小菊
難波阿四郎の
舎弟
漂之亟

小春の霊

初

鎌倉
此所より坂下
真言寺

六丁の過去
春
物語

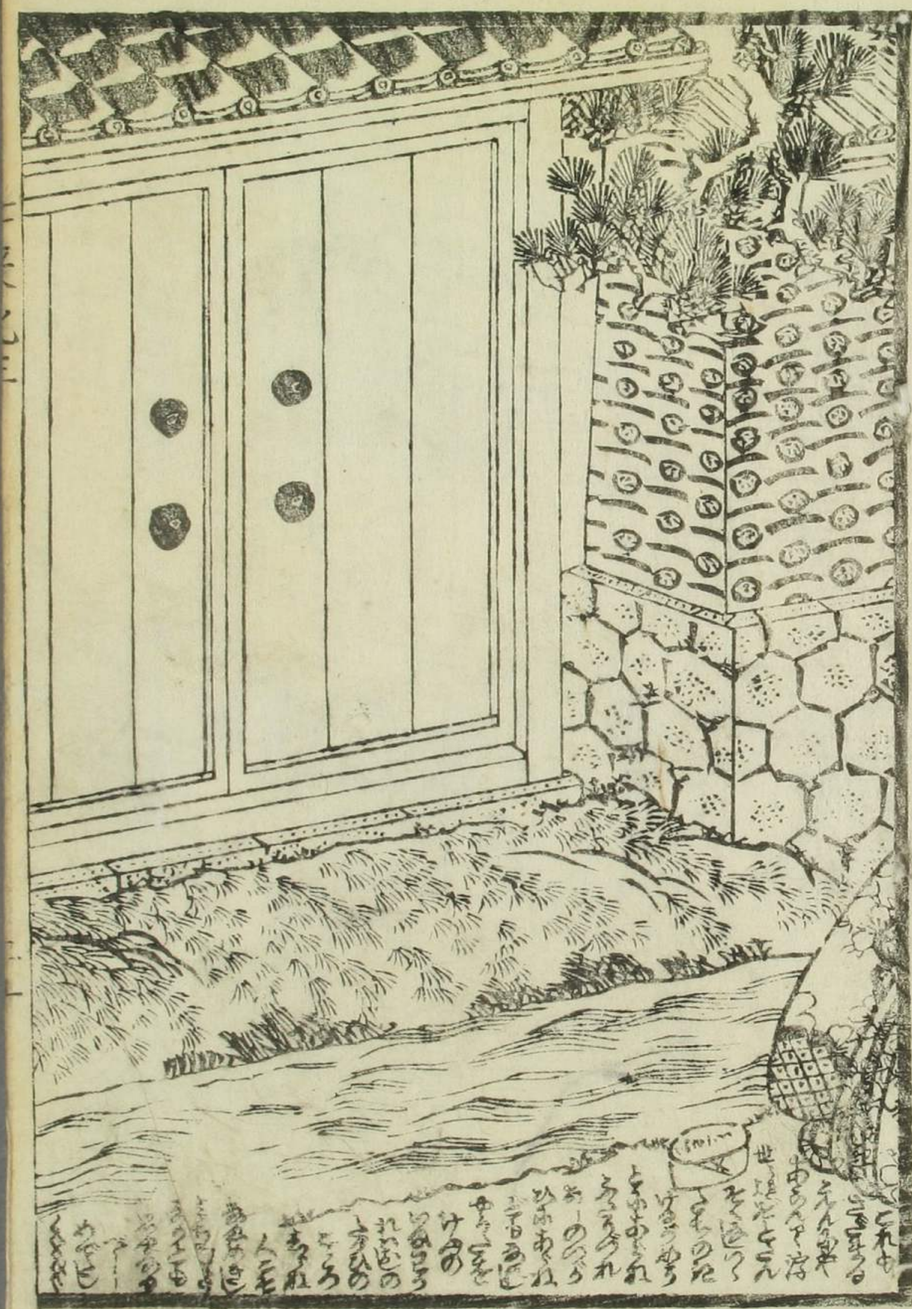
秀賀作國貞画

三
秋

當藤
大福帳
入船帳

七変化三
阿

七変化三
十七



文久二壬戌年春新板目録

柳幕魁双紙　初 爲永馬長作　後 八尾 一壽齋國貞画

都鳥汀松若　初 柳水亭種清作　三 切は同 画

初紅葉小倉色紙　初 同 五 切と同 作画

蝶衝亀山染　初 同 二 三同 作画

義経千本櫻　初同 二 三同 作画

金泗水丹石川　初 花笠文京作　二 三 切は 一勇齋國芳画

縁綱詞花　二 半文字英壽作　三 切は 一松齋芳宗画

當利生一網　二 爲永馬長作　三 切は 歌川國盛画

濡衣女鳴神　二 馬長改 爲永千章作　三 切は 一壽齋國貞画

地本紙問屋　江戸西國横山町三丁目　辻岡屋文助　金松堂

文久二壬戌年新版目次

色衰紙曽我物語　二　初　為永春水作
三　梅蝶樓國貞画

佐崎名郷音武行譽　二　初　楽亭馬作
宮本　三　同　画

三世相錦繍文章　二　初　柳水亭種清作
初　菅川百郷画

蝶鳥裙野辛子雨丹　二　初　柳亭亭種久作
初　一恵齋芳幾画

金花七變化　二　初　鶴亭秀賀作
二　梅蝶樓國貞画

武蔵膏　大貫百丸　小貫三十銅　中貫四十八銅
肥後形町場　飯島喜三郎達製

神仙一角丸
調合所　東京上総國　大野傳兵衛

地本　江戸両國横山町三丁目　辻岡屋文助
金松堂

三乎氏秘方